

京の大人の英知、注入マガジン

# 京都 C.F.

[シー・エフ]

## BACK ISSUES

お近くの書店でお求めになれない場合、ご希望の号数と部数をお電話もしくはファックスにてフェイム事務局までお申し込み下さい。在庫の確認をさせていただきます。その後、代金と送料を切手でお送りいただければ、到着し次第ご送付いたします。

### 2003

No.233

2003.9th



特集  
自分だけの京、  
心尽くしな贈りもの

定価350円  
(送料92円/1冊の場合)

No.232

2003.8th



特集  
例えばこんな  
川床の物語。

定価350円  
(送料108円/1冊の場合)

No.231

2003.7th



特集  
〇×掃りに  
一軒家建築実状あり  
ウラ四条烏丸

定価350円  
(送料100円/1冊の場合)

No.230

2003.6th



特集  
「古着」こそが  
最新の潮流・重ね着文化  
京オトナ「古着」アゲイン

定価350円  
(送料100円/1冊の場合)

年間定額購読

1年間分の「京都C.F.」を郵便振込が銀行引き落としにて、4000円(消費税200円)で予約購読していただけます。お電話もしくは巻末ハガキにてご連絡ください。改めてお申し込み用紙をお送りいたします。

フェイム事務局

〒804-8134 京都市中京区六角通烏丸東入ル 大塚六角ビル2F  
TEL. 075-256-7555 FAX. 075-256-7557

ホームページからお申し込みできます。  
<http://m21.or.jp/fame>

こつそり部屋の本棚におきたくなるバックナンバーです。



フォトグラファー

## 遠藤基成

Endo Motonari

京 TIAN I.D.  
キョーティアンアイディ  
The 110th person

【プロフィール】78年京都生まれ。高校生の頃から描き始めた油絵の、スケッチ替わりにと写真を撮ったのがきっかけで写真に興味を持ち始める。写真スタジオにて修業を積んだ後、現在新聞社の専属報道カメラマンとして活躍中。

## 波間に見る、サーフィンが培う人生 その空気を伝えられる醍醐味



10月にチャラリー「画床」にて開催された写真展「Another life on wave」の様子。青山氏を中心とする、京都のサーファー達のライティング室はもちろん仲間達と見せる表情を捉えた約120点が並んだ



撮影は、陸上から撮る場合も、水中カメラ片手に海中にて撮る場合もある。「奥持ちが海の中で撮りたいみたい」と感じた日は、寒さもないわず海へと進む。撮影とサーフィンだけに明け暮れる一日もあるのだとか。最近水中撮影用に購入したのが、ダイバーを撮影するのによく使用される「ニコソス」のデッドストック(左)



サーフショップ「ノースポイント」を営む青山弘一氏。日本でのプロサーファーの草分け的存在である氏との出会いが、遠藤さんにサーフィン写真を撮ることを決意させたターニングポイントとなった

「サーフィンと人生は似てると思う。いろんな波があって、その中には大きく立ちのぼる壁のような波もあるけど、それを乗り越えようと試みて、そしてまた次の波へと向かう」。その生き様の一瞬を切り取ることが面白いから、と遠藤基成さんはサーファーを追いかけようになった。「新聞社の報道カメラマン」という本業の合間をぬって海へと向かい、カメラを構える。

遠藤さんが覗くレンズの先にあるのは、京都では稀少な存在のプロサーファー・青山弘一氏とその仲間達。「元々興味はあったけど、実際撮影し始めたのは青山さん達に出会ったから」。サーファー=被写体ではなく、その人となりに触れてこそ、はじめて被写体と思うのだと言う。

廻ること3年前。友達に誘われて出掛けたサーフィン初回、借り物のサーフボードをまっふたつに折ってしまうというアクシデントに見舞われる。申し訳ないという気持ちと同時に、海(=自然)に対峙した時に何もできなかったという自分の無力さに気が付き、その事実打ちのめされ「相当へこんだ」。と同時に「すごい魅力あるし、はまったらヤバイ」とも思った。とことんまで追求しないと気が済まない性格をかんがみて、ともかくは仕事に専念と距離を置いたが、目を追うごとにサーフィンへの興味はふつと湧き上がってくるばかり。そこには幾分か「悔しさ」も混じっていただろう。そこで取った手段が、撮影する立場からのサーフィンへのアプローチだ。被写体を求め、ついでに青山氏にコンタクトを取った。「青山さんの話には海や自然への思いが溢れていて、ワクワクさせられたんです」。即断で最冬のまったが、海へと同行した。「海へ入るまでは険しい顔してたのが、海へ入ったら柔らかい表情になる」瞬間を目の当たりにし、波の上にライフスタイルを垣間見た。自然を尊重し共存しながら、サーフィンを通じて人生を構築する。それを伝える術として「写真」という表現方法を持ち合わせたことに、感謝した。今の自分を表すのに、「一瞬一瞬の空気を雰囲気や匂いを凝縮できる写真」こそがベストだと考えるから。そして遂には自らもサーフィンに再度挑戦を始めた。魅力と難しさ、怖さを体感することで、サーファーの目線で見えることができるように。

サーフィンと写真。サーフィンを知ることによって人生に深みが増え、その姿を写真に撮ることで、波の上の人生を万人に伝えようとする。それはまだ生業を成すものではないが、この先遠藤さんの人生の方向を大きく支配するライフワークとなるもの。「Another life on wave=また違う人生の波」に乗った彼の行き着く先を一日でも早く見てみたい。期待は高まるばかりだ。